

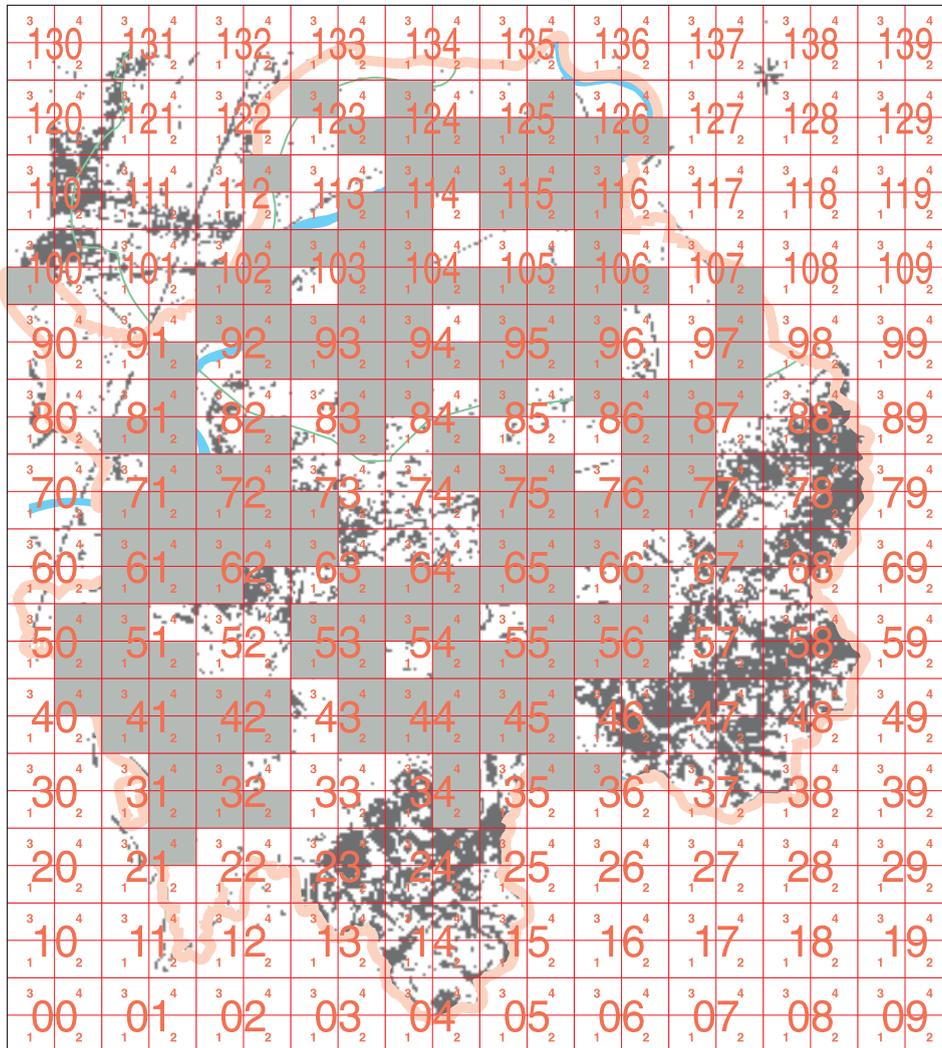
## ① アオサギ (サギ科)



三条市には、信濃川・五十嵐川、その他の小河川、水田、里山など変化に富む水環境があり、魚、ザリガニ、カエルなどを餌とするアオサギには住みやすい所がたくさんあると考えられます。メッシュ図を見ると、ほぼ市内全域で確認されていることがわかります。

大きな羽をゆっくりと羽ばたかせながら、悠々と飛んでいる姿はツルかと思われませんが、ツルの仲間ではなく、トキやコウノトリの仲間です。川の浅瀬や流木の上でじっと動かずに待っていて、近くにきた魚を長いくちばしで捕らえて食べます。

春は繁殖の時期で、高い木の上に集団で小枝を重ねて大きな巣を作り、子育てをします。



調査月	報告件数	メッシュ数
3	21	40
4	31	47
5	30	65
6	20	39
7	13	27
8	18	23
9	11	23
10	13	31
11	7	19
12	10	16
1	7	16
2	7	14
合計	188	(162) 360

時期・鳴き声： 通年 ゴアー、クアッ

大きさ： ツルくらい

特徴： 灰色をした大型のサギです。飛ぶと背の灰色と羽の先の黒色の対照が目立ちます。高い木のある林に集団で繁殖します。

## 野鳥 ② トビ (タカ科)

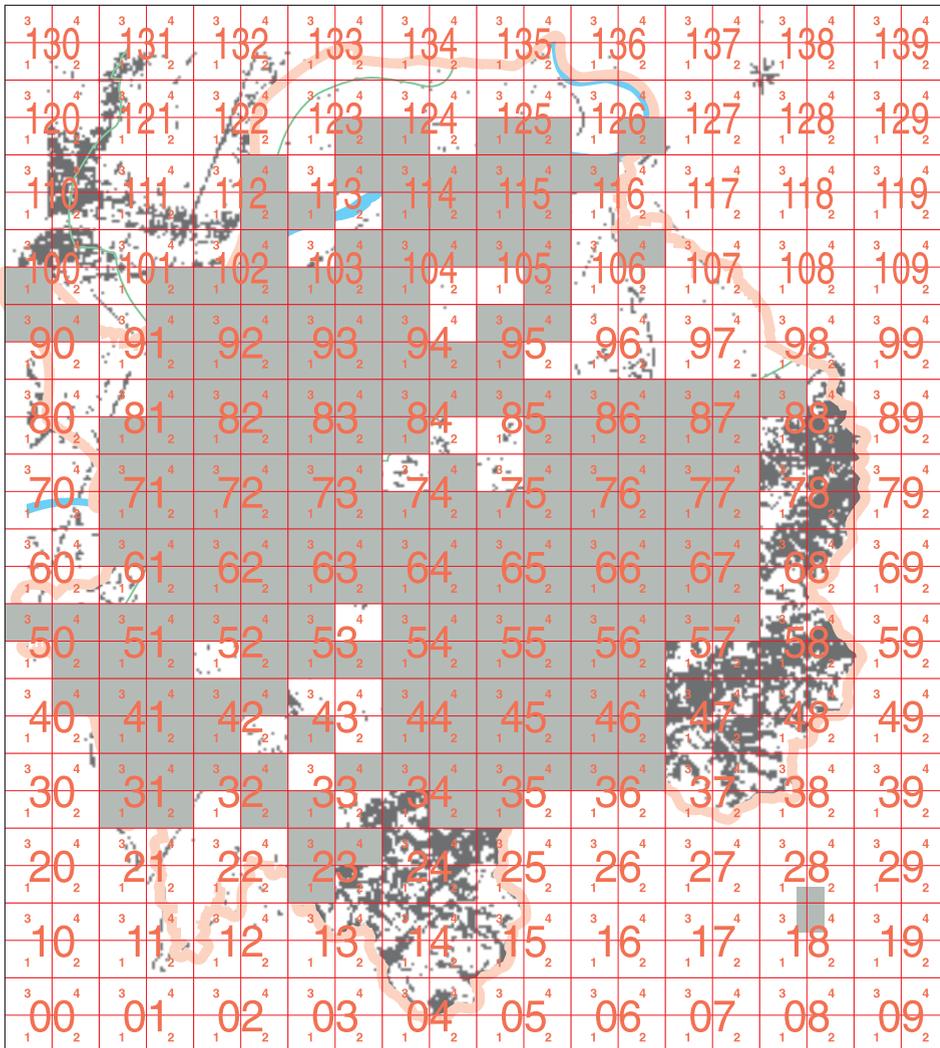


三條岨囃子で「トンビとろろよ大風出せや」と歌われているおなじみの鳥です。トビは私たちの最も身近に住むタカの仲間です。

羽ばたきをしないで上空で輪を描いて飛んでいるのは、地上の動物の死がいや弱って水面近くにいる魚などを探しているためです。

飛んでいる様子をよく見ると、首を左右に回して地上をしっかりと見ながら飛んでいることがわかります。トビは、主に小動物や魚の死がいを餌にしているので「掃除屋」という別名ももらっています。

メッシュ図では信濃川、五十嵐川をはじめ、ほぼ全市域から報告がありました。報告された月別を見ると、一年中見ることができるといえる留鳥であることがわかります。



調査月	報告件数	メッシュ数
3	53	100
4	36	63
5	27	61
6	22	41
7	14	61
8	16	28
9	11	28
10	11	35
11	14	34
12	11	23
1	6	22
2	9	27
合計	230	(202) 523

時期・鳴き声：通年 ピーヒョロヒョロ

大きさ：カラスより大きい

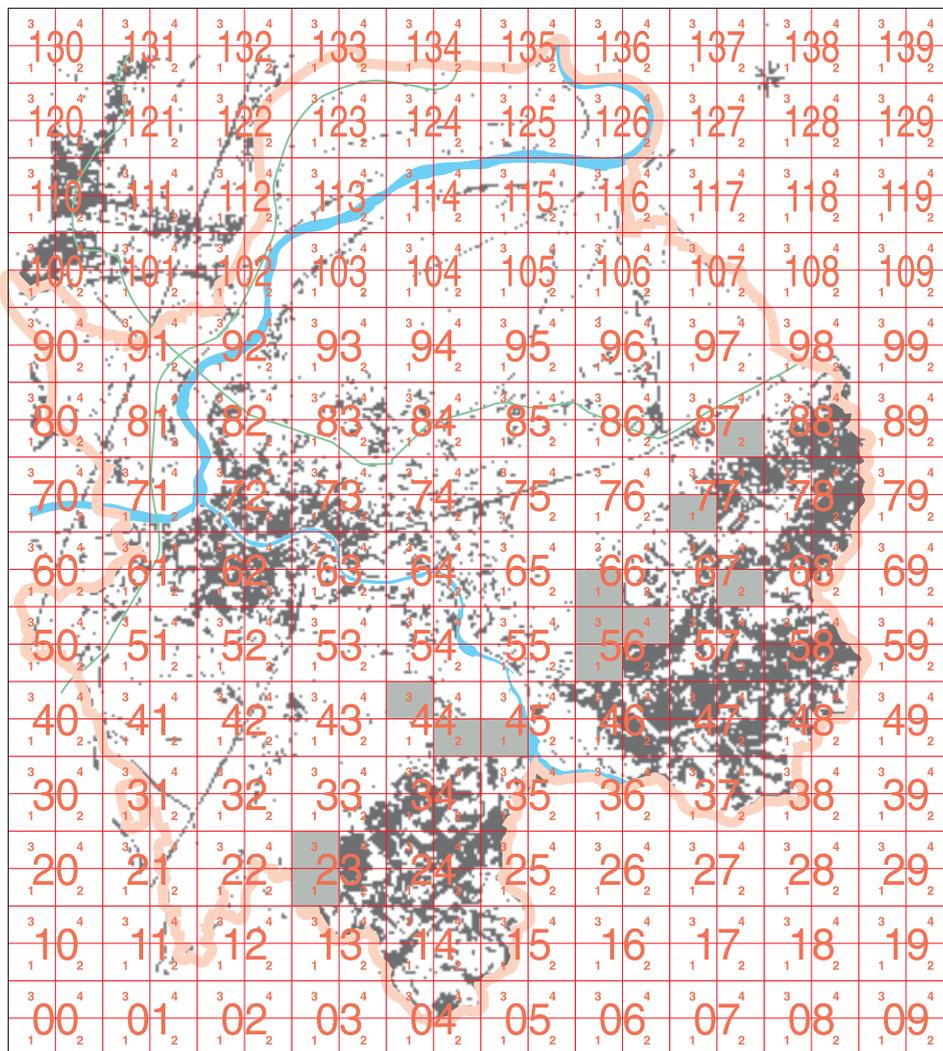
特徴：もっとも普通に見られる鷹の仲間です。飛んでいるときに広げた尾の形が、三味線のバチのような角形になっています。



ゴロスケホーホの鳴き声で知られている体長50cm位の夜行性の猛禽<sup>もうきん</sup>です。

一年中あまり移動することなく、環境が変わらないかぎり長い年月同じ地域に住み続ける留鳥<sup>うろ</sup>です。巣を作る大木の洞（内部が空になっているところ）と、主食となるネズミ類などがいれば人里近くでも生き続けることができます。以前は大きな木のあるお宮やお寺の森にも住んでいましたが、最近は市街地での生息はめっきり減ったようです。

メッシュ図を見ても、保内、大崎山、月岡、如法寺、長嶺などの南東部の丘陵地周辺からの報告があるのみです。フクロウは日没と共に活動し、日の出と共に暗い林で眠りにつくので、日中に見つけるのは難しく、夜間に鳴き声によって確認したという報告がほとんどです。



調査月	報告件数	メッシュ数
3	3	4
4	2	2
5	2	2
6	3	3
7	2	2
8		
9	2	2
10	2	3
11	1	1
12		
1	1	1
2	2	4
合計	20	(16) 24

時期・鳴き声：1～7月 ホーホ・ゴロスケホーホ

大きさ：カラスより少し大きい

特徴：丸い顔で、人間のよう両目が正面にそろっています。ネズミなどを食べる肉食性で夜に活動します。

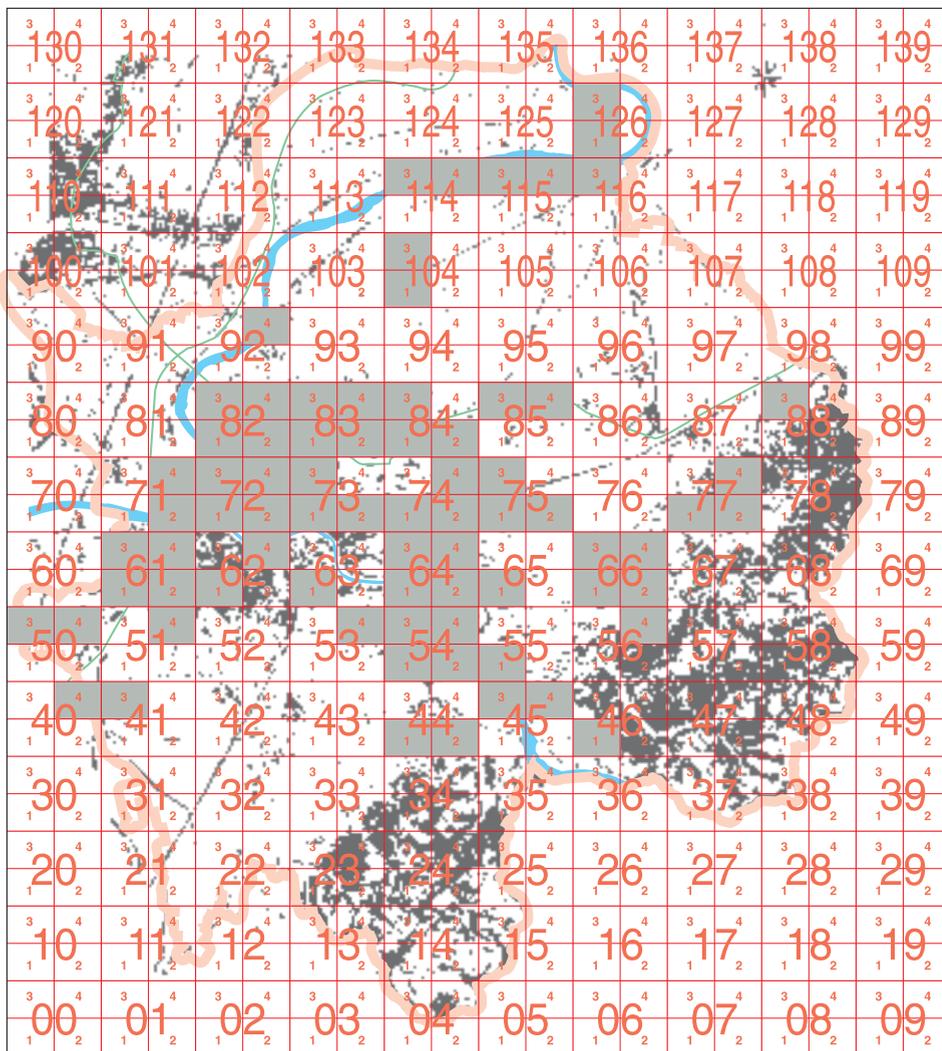
## 野鳥 ④ カッコウ (カッコウ科)



カッコーカッコー「夏がきたよー」と初夏を告げる代表的な夏鳥です。メッシュ図の確認報告数も5～7月にまとまっています。8月になると声が聞こえなくなり、9月には南の方へ去っていく渡り鳥です。信濃川や五十嵐川の河畔林のある河川敷や農耕地に隣接した丘陵地帯で多く確認されています。

托卵の相手を見つけるため広い地域を飛び回りますが、信濃川沿いなどでも空白域があるのは、もともと数が少ない鳥だからと思われます。托卵の相手はモズ、オナガ、オオヨシキリ、ホオジロなどが主なものです。

2004年7月の大水害による五十嵐川改修により、河畔林やヨシ原がなくなり、托卵相手のオオヨシキリなどがいなくなると、来なくなることが予想されます。



調査月	報告件数	メッシュ数
3		
4		
5	37	50
6	34	45
7	12	14
8	2	2
9	1	1
10		
11		
12		
1		
2		
合計	86	(75) 112

時期・鳴き声：5～7月 カッコー、カッコー

大きさ：ハトくらい

特徴：平野部から山地までの明るい林に飛来します。繁殖期には木や電線にとまり、よく鳴きます。とまっている時には、目のまわりの黄色がよく目立ちます。他の鳥の巣に卵を産み込みヒナを育てさせます。



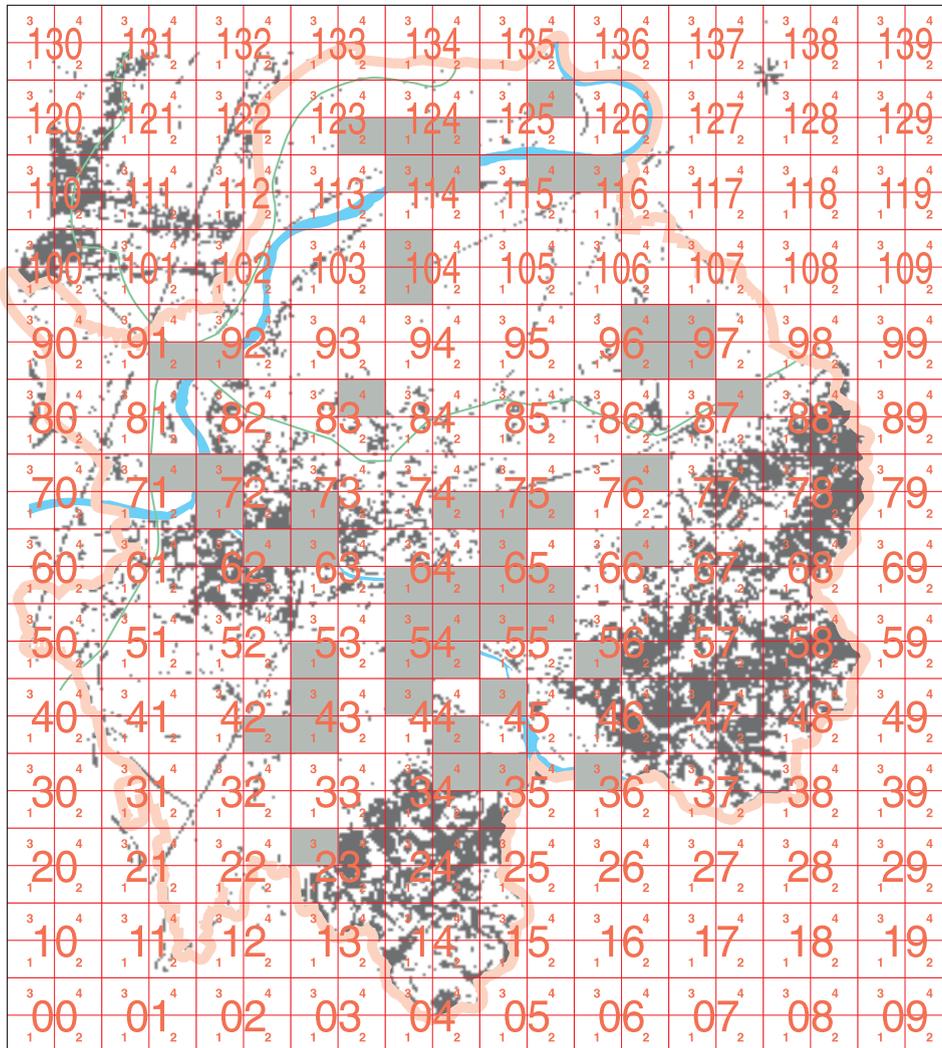
1960年代には、農薬や河川改修などによって全国的に少なくなり、絶滅が心配されてきました。しかし、近年は各地で再び見られるようになりました。

平地から山地までの大小の川や池などの水辺に住み、川岸の枝や杭などの見張場から水中にダイビングして小魚を捕らえ、見張場へもどって食べます。

メッシュ図を見ると、報告数は多くありませんが、広範囲からの報告がありました。

信濃川右岸の荻島や柳場新田などでは、農業排水路沿いでも確認されています。山紫水明さんしすいめいの地の住人とは限らず、幅広い環境に対応していることがわかりました。

崖や土手の斜面などに横穴を掘って巣を作るので、コンクリート等で固められると生存が危うくなります。



調査月	報告件数	メッシュ数
3		
4	9	20
5	18	12
6	3	8
7	2	3
8	4	5
9	2	2
10	3	6
11	2	3
12	2	3
1		
2		
合計	45	(45) 62

時期・鳴き声：4～10月 チー、ツチー

大きさ：スズメより大きい

特徴：コバルトブルーの背中と、オレンジ色の腹の美しさが特徴です。体のわりにくちばしが大きく、水中にダイビングして小魚を捕って食べます。

野鳥

⑥ ヒバリ (ヒバリ科)



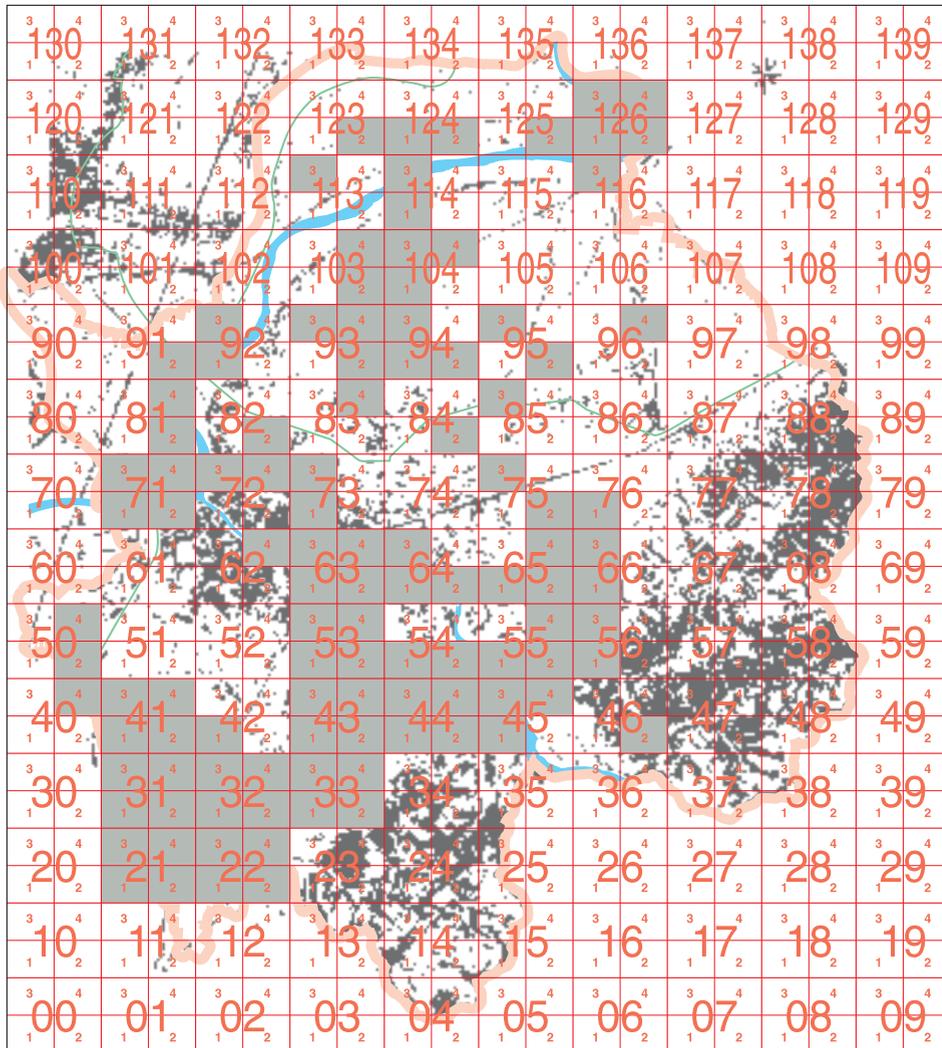
畑地や草丈の低い草原、河原などに住み、歩きながら昆虫や草の種を食べています。

草が茂ってやぶになったり、木が多くなったりして環境が変わると姿が見られなくなります。冬には雪の少ない地方に移動するひょうちよう漂鳥で、調査報告書が示すとおり三条近辺では3~10月に多く確認されていることがわかります。

メッシュ図を見ると、市中心部から北部にかけての信濃川流域、五十嵐川流域、市南東部の平野部に生息が多いことがわかります。

親は警戒心が強く、巣から離れた所に降り、歩いて巣に近づきます。外敵が巣に近づくと親は傷ついたふり (擬傷行動) をします。

繁殖には広い野原を必要とするので、都市化が進むと減少が心配されます。



調査月	報告件数	メッシュ数
3	25	17
4	22	74
5	16	35
6	18	32
7	5	12
8	1	4
9	2	3
10	2	5
11		
12	1	1
1		
2		
合計	92	(107) 183

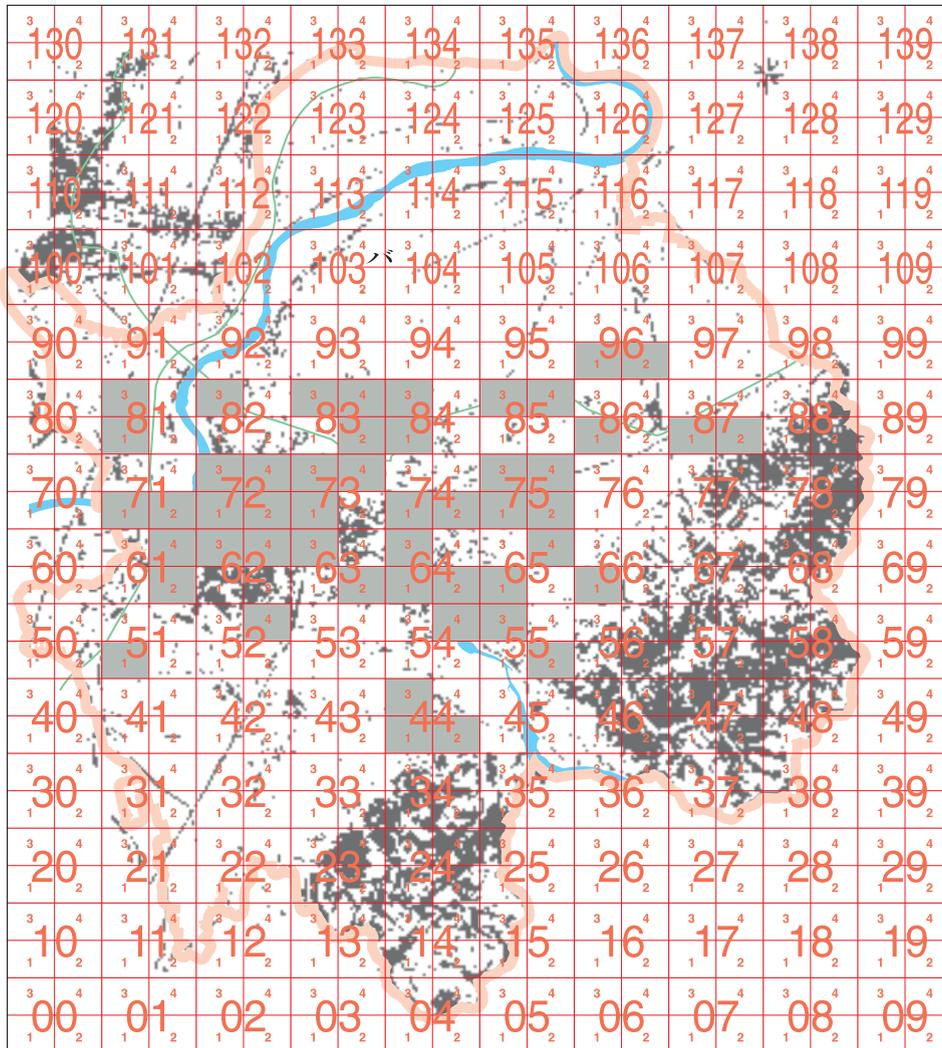
時期・鳴き声：4~9月 ピーチル、ピーチル  
 大きさ：スズメより少し大きい  
 特徴：地上では見つけにくい鳥です。飛び立つ時や上空で停止飛行をしている時には、よくさえずるため見つけられます。野原、畑、河原などに住み、地上に巣を作ります。

## ⑦ ツバメのいる巣 (ツバメ科)



昔から、ツバメは害虫を食べてくれる益鳥として日本国中で愛され、自分の家に巣を作れば大切に見守ってきました。時代が変化し、人の心も居住環境も変わりツバメが見られないのではないかと心配しましたが、市街地を中心にかかなりの報告がありました。しかし、全体的に数が減っているのは確実です。

メッシュ図を見ると、市街地中心部からの報告が多く、農村部からの報告が少なかったのは予想外でした。人の生活圏と共生するツバメには、営巣のための建物と、餌になる飛翔性昆虫（ツバメは飛んでいる小昆虫を空中で捕まえて食べます。）が豊かな水田や川などがある環境が大切です。その意味では、市街地中心部を流れる五十嵐川の存在が大きいと思われます。



調査月	報告件数	メッシュ数
3		
4	9	3
5	26	30
6	25	31
7	11	12
8	1	1
9		
10		
11		
12		
1		
2		
合計	72	(50) 77

時期・鳴き声：3～9月 チュビ、ツビ

大きさ：スズメくらい

特徴：額とのどは赤褐色で腹は白く背は光沢のある黒です。翼は長く、尾は2つに割れています。家の軒下などに土を固めて、おわんのような形の巣を作ります。橋の下などに巣を作る、ツバメより少し小さく、腰が白くて尾が割れていないイワツバメは別の種類です。

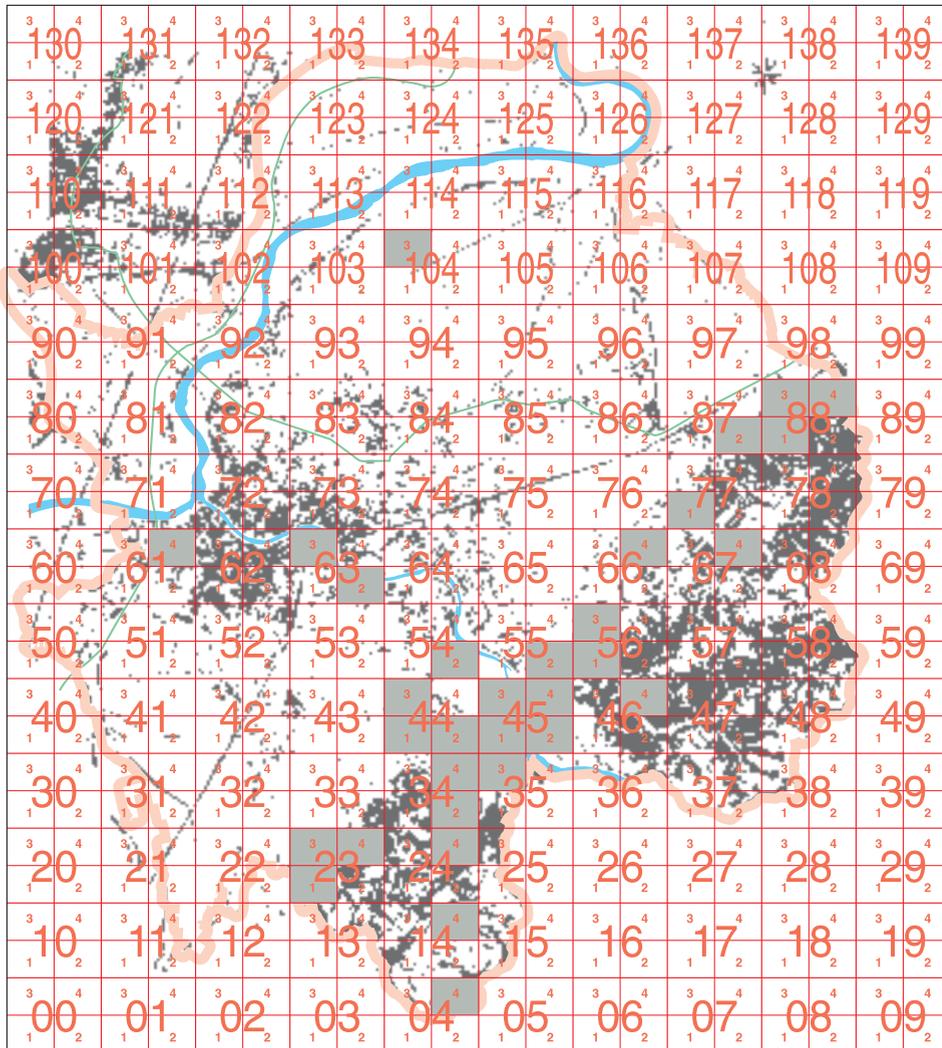
## 野鳥 ⑧ キセキレイ (セキレイ科)



メッシュ図で見られるとおり、保内、大崎、月岡、鱈田方面など、南東部の丘陵地域からの報告が多くありました。平地よりも山地に近い水辺を中心に生息していることがわかります。川岸の草や石ころの間を、小さな虫やクモなどの餌を探して、長い尾を上下に振りながら動き回っています。

五十嵐川流域でのセキレイ類の分布を見ると、河口付近の下流域にはハクセキレイ、中流域にはセグロセキレイ、上流域の下田方面にはキセキレイが多くなります。

冬には移動するらしく、ほとんど姿が見られなくなります。最近では全国的に減少している鳥と言われていて、三条付近でも注意して見ていく必要があります。



調査月	報告件数	メッシュ数
3	3	2
4	13	23
5	7	7
6	6	8
7	6	5
8	2	4
9	2	3
10	1	2
11		
12	1	1
1		
2	1	1
合計	42	(32) 56

時期・鳴き声：4～8月 チチン、チチン

大きさ：スズメより少し大きい

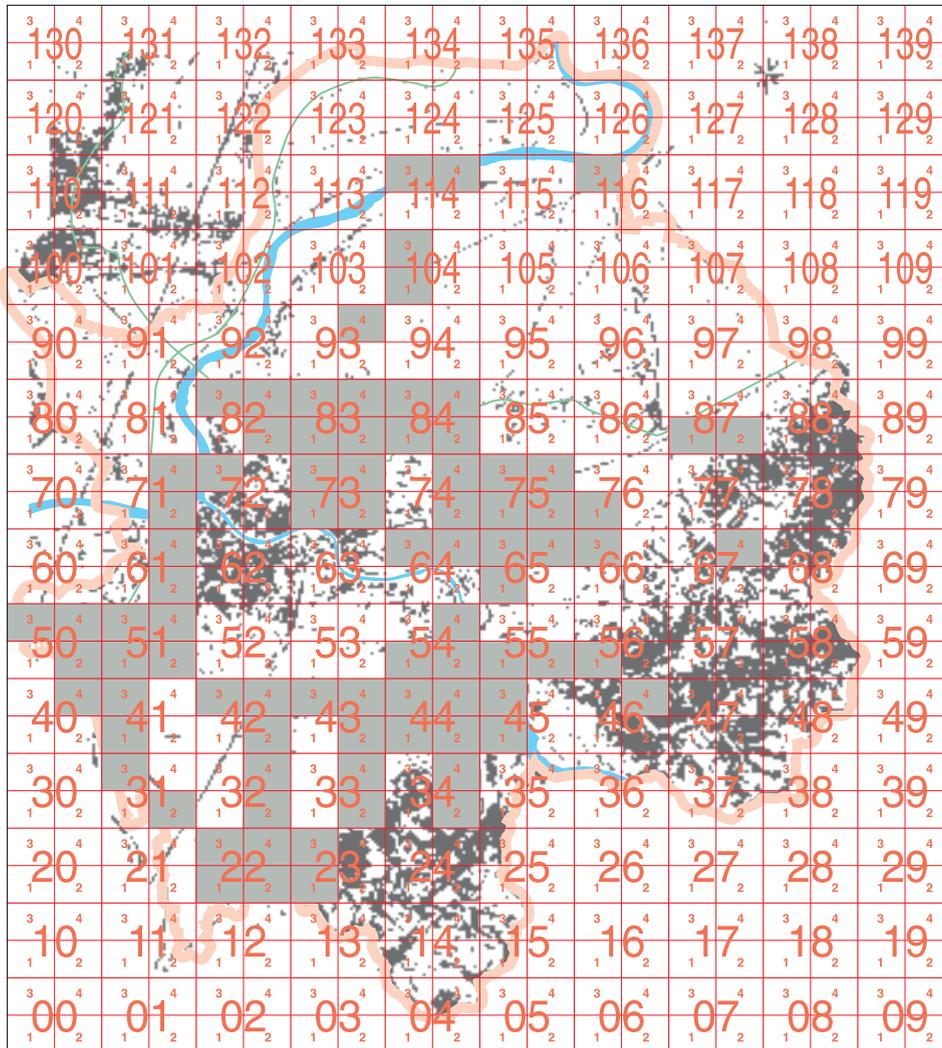
特徴：尾が長く腹の黄色が目立つ小鳥です。大きな波型をえがいて飛び、尾の両側の白い色が目立ちます。



秋になると高い木のでっぺんやテレビアンテナの上などで、キーンキーンと甲高く鳴く姿はモズの高鳴きといわれています。それは、この時期に縄張りを持つため、縄張りの中で、カエルやトカゲ、昆虫などの小動物を捕って食べています。また、餌を、小枝やとげに刺しておく習性があり、モズの「速<sup>はや</sup>にえ」といわれています。

メッシュ図によると、北西部の信濃川流域からの報告が少ない感じはありますが、ほぼまんべんなく生息していることが推測できます。

最近モズと近い仲間で、頭が灰色をしたチゴモズの姿をほとんど見かけなくなりましたが、モズも減少傾向にあるようです。



調査月	報告件数	メッシュ数
3	12	11
4	17	46
5	15	30
6	11	14
7	6	6
8	5	6
9	8	13
10	11	25
11	7	8
12	4	8
1	2	4
2	3	3
合計	101	(84) 174

時期・鳴き声：3～11月 ギチギチ、キチキチ（舌と書くとおりに、他の鳥の鳴きまねをよくします）

大きさ：スズメより大きい

特徴：オスは背中が灰色、頭が茶色で、メスは全体が茶色です。止まっている時は、細長く見える尾をゆっくり回すように動かします。

野鳥

⑩ オオヨシキリ (ウグイス科)

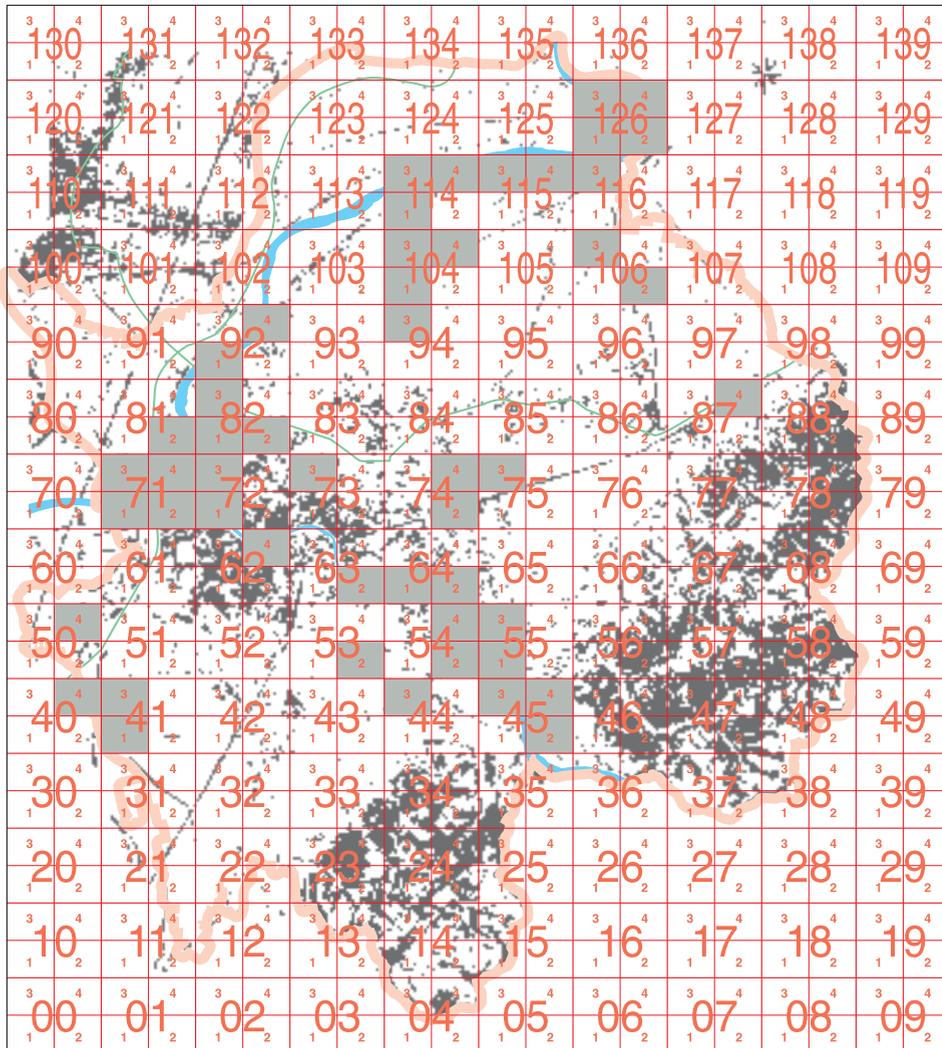


名前が示すように、繁殖するためのヨシ群落があることが生息の条件です。メッシュ図を見ると信濃川、五十嵐川の河川敷や湿地、点在する休耕田などのヨシ原で確認されました。

4月下旬頃に渡って来て子育てをし、10月には暖かい国へ渡る夏鳥です。5月になると古い枯れたヨシに斜めにとまり、ギョギョシ、ケケシと赤い口を開けて大声でさえざっているのが観察できます。俳句では「行々子<sup>ぎょうぎょうし</sup>」といい、夏の季語として親しまれています。カッコウの托卵相手としても有名です。

五十嵐川流域のヨシ群落は、河川改修で一時姿を消すものと思われませんが、オオヨシキリの動向に注意が必要です。改修後は、今行っている一斉刈り払いではなく、ヨシ原をすみかとする生き物の保全を考えた取り組みが必要です。

能なしの寝むたし我をぎょうぎょうし 芭蕉



調査月	報告件数	メッシュ数
3		
4	2	2
5	20	30
6	20	33
7	6	9
8	5	4
9	3	2
10		
11		
12		
1		
2		
合計	56	(47) 80

時期・鳴き声：5～7月 ギョギョシ、ケケシ  
 大きさ：スズメより少し大きい  
 特徴：「カラコウジ」とも呼ばれ、河原、池沼、湿地などのヨシ原で子育てをします。ヨシに枯れ草などを巻きつけ、コップ状の巣を作ります。